［資料紹介］

携帯用化粧道具セット

立川 有理子／ポーラ文化研究所

図 1.携帯用化粧道具セット　明治時代〜大正時代

本資料はポーラ文化研究所が所蔵している明治時代末〜大正時代の携帯用化粧道具セットである。表面は織地で、赤、青、白の色彩が鮮やかな花模様が表現されている。二つ折になる仕様で、金属の留め具を外すと、内部には両面にぎっしり化粧道具が収められている。紅筆と刷毛が入った小箱、鏡、髪を整える櫛や筋立て、爪やすり、楊枝、耳かき、剃刀、鋏、さらに、近代化が進む当時のよそおいの最先端アイテムだった香水も備わっている。

携帯用化粧道具セットは、煙草入れや紙入れ、手提げ仕様の巾着袋など、当時いわゆる「袋物（ふくろもの）」と呼ばれたものの一つに該当し、小間物店などで取り扱っていた。また、女性用だけではなく、男性用もあり「男持化粧品入」などと呼ばれていた。さらに、当時の雑誌などの媒体では、携帯用化粧道具セットについて、旅の主要な携帯品として紹介されている。

明治時代は鉄道網が発達したことで、旅がより身近になった時代である。新聞付録『都の華』[1]明治 30 年 8 月 10 日の号では「避暑案内」と題し、各地の海や山、温泉地などを紹介し、「百里や二百里は隣家へ茶飲話に行くよりも手軽のやうなれど、開けゆく時勢に連れて、携帯品も却て昔より複雑となり、僅かに一蓋の編笠と一筋の竹杖とに五十三次を又に掛けるといふ単純なる出立は

[1] 『都の華』は 1884 年に、「今日新聞」として東京で創刊された「都新聞」（改題後）の付録雑誌。明治 30 年 6 月 4 日の第 1 号には発行趣意として衣食住の流行を記して読者に示すとしている。

今は稀れなり[2]」と遠方への旅が手軽な時代になったこと、携帯品が増えていることを記している。具体的には、鞄や傘、時計といった移動の必需品、旅の記録をする写真機、日記帳などと共に、携帯用化粧道具セットも詳細に掲載されている。ここで紹介されていたのは、外側は革や織物で作られ、組み上げてちょっとした手提げ鞄のようになるタイプである。鞄の中には鏡や櫛、香水、香油、歯磨きや石鹸、各種ブラシなどを収納することが掲載されている。

図 2. 留め具を外し、開いた状態

こうした当時の様子が伺える雑誌の記載とともに携帯用化粧道具セットをみると、刷毛や紅筆といった顔まわりの化粧道具だけではなく、髪型や指先を整えるもの、まとう香りまでがコンパクトに収められ、持ち運びに便利な仕様になっていることがよく伝わる。旅先でも、もちろんその他のシーンでも、細部まで身だしなみを整えていたいという当時の人々の美意識を感じとることができる資料である。

携帯用化粧道具セット
日本：明治時代末-大正時代
12.5×8.0×4.5 ㎝

主要参考文献

流行門. 風俗画報. 190 号. 東陽堂, 1889-6-10, p.26-28.

由田清一. 大阪小間物装粧品変遷史. 大阪装粧品共同組合, 1960-8-1

津田紀代. 近代の携帯化粧道具. マキエ. No.29. ポーラ文化研究所, 2009-6-30. p.11.

[2] 旅行の携帯品. 都の華. 第 3 号. 都新聞社, 1897-8-10. p.14.